

## 1. 玉川上水・水車の始まり

慶長8年(1603)江戸幕府が開かれ、それに伴う人口の増加により、飲料水・生活用水確保のため、承応3年(1654)に玉川上水が開削された。明暦2年(1656)には小川新田開発と小川分水が許可された。

### 水車の設置

わが国への水車の伝来は610年(推古天皇18年)の頃といわれている。(日本書紀に記録がある。)

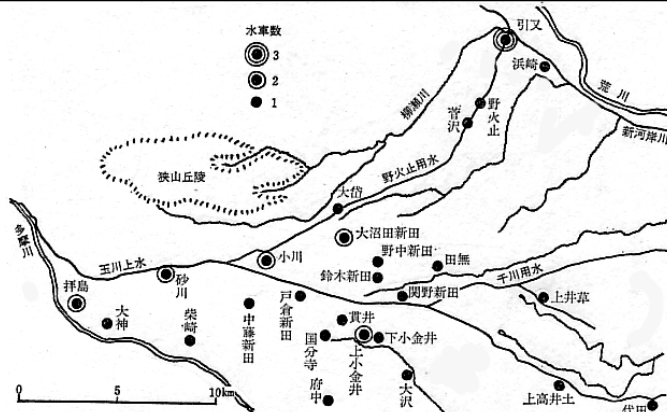
玉川上水系最初の水車は元禄10年(1697)、上仙川村(現三鷹市)の品川用水に、江戸糶町(現千代田区麴町6丁目)粉屋久平衛が挽臼2台を備えた水車を設置した(この水車は水利権を持つ品川領九カ村の許可なく設置したので訴訟騒ぎになり、間もなく堰と水車を撤去した)。

享保3年(1718)、砂川村重蔵が柴崎分水に水車を仕掛けたとの記録がある。

また、宝暦11年(1761)下小金井村の百姓才治が挽臼1台、搗杵10本の水車を下小金井村田用水に設置した。

翌年には野火止用水末流の引又村(現新座市)でも水車が設置された。この頃から各地に急速に進展した。

「上水記」によると天明8年(1788)には、玉川上水の分水に設置された水車は30台を越えた。



「上水記」天明8年「水車改書付」を图示

伊藤好一「武蔵野と水車屋」より

新田開発が進み農作物の種類と生産量が增大すると、分水に水車を仕掛け穀類の精白や製粉を行い、それを生業とする水車稼ぎ人も出てきた。

## 2. 水車の工夫(回し堀とほっこ抜き)

水車は、水輪の高い位置から水がかかる「上掛」式が最も能率がよく、大きな回転力が得られる。

しかし、平坦な土地が多い武蔵野台地を流れる玉川上水の分水では、もっぱら「胸掛」式が多く用いられた。

緩やかな勾配の分水に設置された水車は、「落差」を増やし、より大きい回転力を得る独特の工夫がなされた。

### ① 回し堀

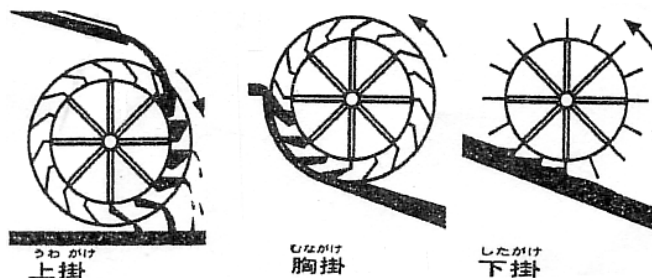
本流の取水口から水車まで土堤(築樋)を築き、土堤の勾配を本流の勾配より小さくして落差を得る。

### ② 水車(水輪)を地表面や地下など、できるだけ低い位置に設置する。

### ③ ほっこ抜き(ほり抜き)

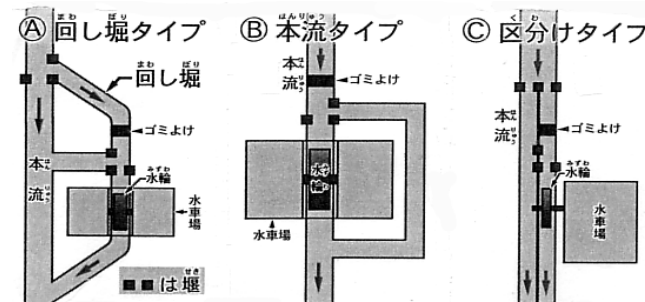
本流よりも水位の下がった排水を、本流より緩やかな勾配の長いトンネルを掘って流し、下流で本流の高さになってから本流に戻す。

### 水輪に水の掛けかた



下掛式は比較的小型の水車や揚水用水車に多い。  
(武蔵野地方ではほとんど見られない。)

### 水路のタイプ



図は小坂克信「立川の水車をさぐる」より

## 3. 水車あれこれ

### 水車の所有者

初期の頃は名主、村役人など村内の有力者のものが多かったが、生産力が高くなるにつれ百姓個人または、共同による水車が多くなった。

### 水車税

幕府や領主に所有者が莫加金を納めていた。額は臼数等で決められていたようだが不明な点がある。

### 水車設置の条件

用水を利用する村人や流末を利用する他村の了解のほか、武蔵野のほとんどの地域は尾張家の鷹場だったので代官所や鷹場役所の許可が必要だった。

無許可で設置した水車は奉行所に訴えられ撤去されたものもあった。

### 水車の用途

当初は穀類の精白、製粉を目的にした。時代を経ると適用範囲も拡大し、撚糸、火薬造り、大砲の砲身削り、発電機動力、伸銅、エポナイトやカレー粉、唐辛子の粉碎などにも用いられた。

## 4. 小平の水車

### 小平の初期の水車

小平では明和2年に小川村最初の水車が設置された。

市内、各新田最初の水車一覧 (小平町誌ほかより作成)

年号	設置場所、人
明和2年(1765)	小川村用水に名主小川弥次郎、初めて水車を設置
明和9年(1772)	大沼田用水に名主弥十郎、年寄伝兵衛が屋敷内に水車を設置
安永4年(1775)	小川新田用水に熊野宮の神官、宮崎采女、屋敷内に水車を設置
安永7年(1778)	鈴木新田内の田無村用水に百姓喜兵衛、水車を設置
寛政10年(1798)	野中新田用水に、百姓長右衛門、水車を設置。廻り田新田に百姓忠兵衛、水車を設置

## 5. 小平の水車変遷

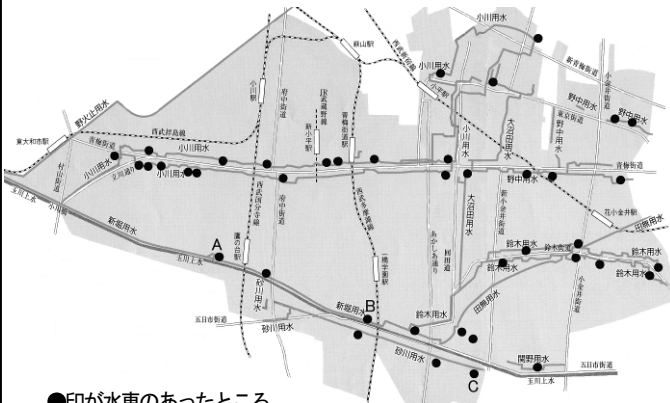
安政4年(1857) 小平の水車稼ぎ人

鈴木新田 惣右衛門代又右衛門、定右衛門、長十郎  
 野中新田 善左衛門、弥五左衛門代仲右衛門、源八、  
 武兵衛、長右衛門、藤右衛門  
 大沼田新田 弥左衛門、伝兵衛  
 廻り田新田 忠助、庄兵衛  
 上 鈴木 五郎兵衛  
 小川村 九一郎  
 小川新田 弥一郎、日向

『小平町誌』より

幕末以後、小平は雑穀生産地帯として成長した。これをもとに明治30年(1897)前後、水車は完全に出揃い隆盛を極めた。この頃水車は小平で約40箇所あった。

### 明治30年前後の水車分布



●印が水車のあったところ

A 小島水車 B 清水水車 C 高杉水車

小平町誌などから作成

### 水車の衰退

その後約40年の間に次々と消滅して行った。その原因は水力から、蒸気・電力への動力源の転換と、高効率の機械製粉機の出現や製粉企業の進出など。また、産業形態が原料加工品の供給から、原料そのものを供給する形態へと移行した。昭和25年(1950)頃玉川上水の水量減もあり、次々とその使命を終えていった。

## 6. 市内の水車遺構

**小島水車** 明治7年(1874)5月に小川弥次郎が、今の新小川橋北にある小島精米店の西側の新堀用水に設置した水車を、明治39年(1906)小島啓助が買い受けた。水輪の直径7.20m(2丈4尺)、水輪の幅84cm、挽臼6台、搗杵20本、排水方式は胎内掘り(ほっこ抜き)

この水車は昭和25年頃まで稼動していた。現在、新堀用水に「堰跡」、北側の山林内に「回し堀の築樋跡」、水輪に水をかけた「海老樋」などが残っている。近くの「水車通り」や「水車橋」はこの水車に由来する。

**清水水車** (写真参照)

水輪の直径 約3.3m(1丈1尺)、搗臼 1斗張10台  
 明治32年(1899)新設され、昭和25年頃まで稼動した。回し堀への堰跡が新堀用水に残る。

**高杉水車** 茜屋橋の南西、高杉商店前の砂川用水にあった。この水車は用水本流に直接仕掛けられ、南側に「く」の字型に余水や水車を止めるときに流す水路があった。

砂川用水がこの先しばらくの間、暗渠となっているのはこの水車の排水をほっこ抜きで流した名残である。

## 豆知識

### 水車の爆発事故

ペリー来航で慌てた幕府は各地で水車を使った火薬の製造を行った。安政2年(1855)、鈴木新田の定右衛門所有の水車(今の鈴木小学校付近)を幕府が買い上げ、幕府御用の「焰焔合薬搗立所(えんしょうごうやくつきたてしょ)」とした。水車を使い火薬の製造をしていたが、この年10月に爆発事故を起こした。

この前年、安政元年の6月には、玉川上水から神田上水への助水堀にあった「淀橋水車」が爆発事故を起こすなど、この頃各地で火薬製造水車の爆発事故があった。

(淀橋水車は再建され昭和11年ごろまで利用された)

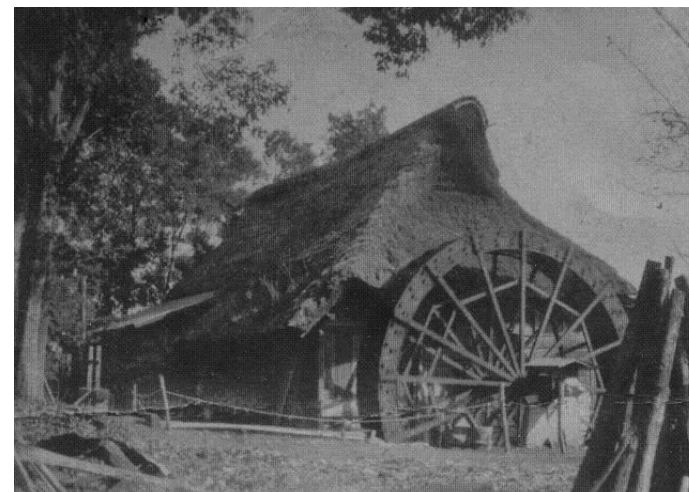
### 図書館「水車の館マーク」

小川西図書館の蔵書に貼られている水車の館マークは、小川村に玉川上水からの分水を利用した農業用水車が江戸時代から昭和の時代まであったことに由来する。



## 玉川上水ワンポイントガイド No.6

### 玉川上水の水車



新堀用水・桜橋付近にあった清水水車 (昭和9年・1934)

### シリーズ 玉川上水ワンポイントガイド

No	テーマ
1	玉川上水の概要
2	玉川上水の分水
3	玉川上水の分水・小平編
4	玉川上水と小平周辺の新田開発
5	玉川上水の橋
6	玉川上水の水車
7	玉川上水の通船・船溜り
8	玉川上水の樹木・野草・野鳥
9	玉川上水と小金井サクラ
10	玉川上水あれこれ
11	玉川上水お勧め散歩ガイド

発行 2007年9月

発行 小平・玉川上水再々発見の会  
 E-mail tamagawasaisai@yahoo.co.jp  
 代表 庄司徳治